

「気流の部屋が誕生」

# 益野英昭

さん  
(宮城県在住)



## 機器選びだけの時代は終わった 積極的な音楽の調和を生み出す オーディオルームの重要性を問う

ローゼンクラッツの追求する音の世界とは何か……。従来の共振してはいけないという発想ではなく、あるルール。すなわちオクターブ和音に沿った長さ(カイザー寸法)を組み合わせることによって、積極的な音楽の調和が生み出せるはずだ。そのような観点からいかに振動と折り合いをつけ、うまく走らせることができるのか。さらに「気流」という要素がステレオ再生で何よりも重要だろう。今回は「気流の部屋」の実践例として、仙台の益野英昭さんを訪ねる。

●レポート: 林正儀  
Masanori Hayashi  
photo by 難波明彦



約25畳ある益野さんのリスニングルームはすべてカイザーサウンドの設計によるもの。床はベースとなる根太(ねだ)の段階からドとソの周期の波を計算しながら設計。フローリングは無垢のウォールナットとなる

貝崎さんとの信頼関係から  
ゼロベースからスタート

益野さんは「ムツシュ・マスノ・アルパジョン」という大型のケーキ店を経営する、47歳の若きオーナーだ。150坪ほどの店舗が6つ。セントラル工場は持たず、1店1店に工場を併設するというオリジナル経営が評価され、「グレートカンパニー10社」に選出されている。そのユニークな発想とチャレンジ精神をオーディオへの情熱にかえ、作り上げたのが今回訪問する新築オーディオルームだ。

この部屋はカイザーサウンドの代表、貝崎静雄さんとの信頼関係でスタートしたプロジェクトだが、「益野さんからの白紙の小切手をいただいたようなものです。ゼロから思う存分やらせてもらった。ありえないことだ。ここまでできたのは、多分これが最初で最後でしょう!」という壮大なものであった。お付き合いが長い前号の京都のユーザーさんとは違い、事前に一面識もない二人が、なぜここまで共感しあえたのか?そのエピソードはご想像にまかせるとして、ここにはローゼンクラッツの集大成ともいえるべきあらゆる秘術が、ぎゅつと濃縮されていた。

カイザー寸法に設定された  
ピアノの鍵盤のような柱

25畳ほどの広々とした空間である。いきなりビッド・オーディオのGI・GIYAやダンダゴスティーノのモメンタムに目がいきそうになったが、それよりもピアノの鍵盤のような正面の壁。そして隠れて見えないのだが、フロアや天井裏にも、あつと驚くカイザー流のこだわりがしのばせてあるのだ。実は行きの東北新幹線「やまびこ」の車内で、図面や作っている現場を貝崎さんにレクチャーしてもらっていた。鍵盤のような……というのは、コンクリートの壁にアンカーボルトでダイレクトに締め込んだ巨大な7本の柱(板ではない!)。これはデザインではなく、1カイザー(95センチ)を起点としたドとソの関係に、その長さを選んである。ソは2/3であり、音楽の波長が共鳴し合う理想の状態だ。間には天然大理石があしらわれていた。これは施主の希望だ。そう、全面大理石張りというアイデアは反響が強いため却下された。

床はベースの部分から慎重に採寸  
周波の波を絶妙にコントロール

天井はどうかというと、三本川のようにやはり長さ違いの柱がセット。これが実はアンカーでコンクリートの天井に吊している(二重構造)。そこまでやるかというこだわりがフロアの構造だ。床のベ

スとなる根太(ねだ)は、年輪のつまり具合を見ながら順番にマーク。きれいにセンターから左右へとステレオ展開される。長さはもちろんカイザー寸法だが、念のいったことにピッチもスピーカー側とリスナー側とで狭くまた粗くと、慎重に採寸してある。重量への配慮だろう。「床ではドとソの周期の波が起こっているという事です」。恐ろしいことに釘の位置まで指定してあるそうだ。検聴不能だが、これは信じるしかないだろう。普通は均等にカットするだけなのに、わざわざ差をつけるのがカイザー的美学。見渡す限り美しい。

またウッドの素材についても、フローリングは無垢のウォールナット。ヨーロッパのホールで専ら用いられるパインの壁材、さらにハードメイプルなど、ふんだんに高級木材を採用している。

3次元でカイザー方式を徹底  
音楽が生き生きと響きわたる

縦・横・高さ3次元でカイザー方式を徹底させれば、音に悪からうはずがない。私はもう何度となく、奇跡を体験し、よき理解者になりつつあるようだが、あれもこれもすべては理想のステレオ再生のため。生き生きと音楽が響きわたるためなのだ。ステージの中央で歌ったとする

# 「オーディオにかけるひたむきな情熱」の伝説は「まっ」に始まる！



夢のハイエンド機が並ぶ益野さんの愛用システム。スピーカーはVIVID audioの「G1 GIYA」。GOLDMUNDのモノラルパワーアンプ「Telos 1000」、プリは「Mimesis 22」で駆動している。DAコンバーターはCH Precisionの「C1」を使用し、aurenderのメディアサーバーでリッピングしたCD音源を楽しんでいる。なお、ほとんどの機器は内部配線等、こだわりのチューニングを行っている。オーディオラックはすべてローゼンクランツ製



システムの中央には「Sound Revolver」(¥70,000)が置かれる。乱気流を吸い込み拡散させる効果がある



VIVID audioの「G1 GIYA」には「GIANT SPIKE」を装着し、「GIANT BASE」をその受けとして設置するという盤石の足場固めである



取材日の当日は「Stream Revolver」の効果も実験。1台置くだけで部屋全体の気流をコントロールすることができる



正面の壁には楯の集成材による7本の音柱を設置。この柱は奥行きが20cm近くあり、コンクリートアンカーで固定されている。これら柱の間にはフランスパイン材と大理石が配置され、すべてがカイザー寸法で構成されている



楯の集積材による音柱はカイザートルクでチューニングが可能となっている



天井は日本家屋の蔵に使われた漆喰を使用。天井は傾斜があり、その傾斜を利用して奥行き10cm近い楯の集積材の柱を3本をコンクリートからアンカーで固定している



左右と後方の壁はフランスパイン材を特殊に加工したものを採用。これらもすべてカイザー理論で音の走る方向に揃えられている



益野さんのリスニングルームはカイザーサウンドの貝崎静雄氏への絶対的な信頼関係から生まれたものである

高度に調整された室内音響に様々なアクセサリも呼応

これはG1・GIYAに敷かれたジャイアントベースのおかげもあるが、音が走るよう高度にチューニングされた室内音響の賜物だろう。ルームチューニング機能の付いた5台のカイザーラックもあわせて、

さんは満足げである。この2曲で何もいらぬ感じが、筆者が持参したジャズ、ロック、和楽器など様々なジャンルの音源をかけても、オーディオ的な鮮度や情報量が圧倒的に素晴らしく、レスポンスも緩急自在。またスピーカー間が広いのに薄まらず、音場が密。低音のキレや力強い沈み込みも、偽りなく過去最高レベルだ。

同じ方向にタイミングと歩調が揃うのだ。淀みや弛緩もなく、正確なエネルギー変換の追求は完璧だ。既設のサウンド・リボルバーに加え、今回は「気流の救世主」ストリーム・リバイバーも持参。ここからさらにグレードが上がるとは信じがたいのだが、奇跡は起きた。側面の複雑なパターンで気流がコントロールされ、さらに透明にクリアに。また空高く音場が立ちのぼるようなステージ表現に、益野さんはしばし茫然である。



音楽、オーディオへの思いを熱く語ってくれた益野さん。様々な情報に惑わることなく、自分自身がいいと思った選択を信じ、とことんまで追求していくというポリシーに筆者も感動を覚える

音の95%はコンポで決まると信じている読者には、いやいや部屋の支配は絶対的と発想をかえて欲しい。とにかくルーム音響はセッティングとともに最重要。スピーカーの外に、もうひとつ響きのよいエンクロージャーがあるようなイメージだ。

「逆にコンポントは自分で気に入った物、惚れ込んだ物を買って下さい。結果はきちんと出しますから」。こういつてくれると肩の荷がおりるわけだが、益野さんはコンポネット選びも一流だ。オーディオは若い頃に少しふれて、8年ほど前から本格的に再スタート。先ほどのG1・GIYAやモメンタムは、新リスニングルームにあ

るようにすべての手が打たれている感じだ。

音は機器だけでは決まらない部屋の支配は絶対的な要素

わせて調達したそうで、ほかにもゴールドムンドのテロス1000や最近はじめたPC&ネットオーディオのためオーレンダーや高級クロックジェネレーターも見える。

リアル過ぎるヴォーカルはスタジオの奥の空気まで見える

描いていた通りの、ヒューマンでハイエンドな試聴室だった。森林浴のようなほのかな木の香りがして温かく、高S/Nでとてもリラックスできる。

「ヴォーカルのリアル感が好きなんです」。益野さんが次々にかけたのは、CDのリッピング音源だ。平井堅は清涼さにあふれる、ハイトーンが美しい。心が洗われるような浸透力があり、ギターも繊細で余韻がきれい。「この部屋になって、にじみが消えました」「スタジオの奥の空気まで見える」と益野さんは満足しきった様子。友人から、平井堅専用の設定をしているのか(笑)といわれたそう。次に、仙台を中心に活躍している男性グループ「Rake」。東北のメッセーજソングなど人気だが、女性スタッフが大好きで、彼女を泣かせたいと選んだものだ。透き通ったアカベラが心をつかむ、魂をゆさぶる。高揚するハートモニが全身の末端までしみわたる。リアル過ぎるヴォーカルだ。

「現実を超えました……」と益野

## リスニングルーム 施工前の様子



天井柱の工事の様子。音柱はコンクリートにアンカーで直接固定されている



壁に設置された音柱はこんなに大きい。奥行きが20cm近くあり、大人4人でやっと持ち上げられるほど



床をはる前の根太(ねだ)の工事段階からカイザー寸法で設計

再度聴き直した男性ヴォーカルやギターのゾクつくくるニューアンスや実像感はどうだ。またピアノやドラム、シンバルも、さらにビッグバンドまで輝きと空間エネルギーが充実した。もちろん生々しさもアップして、よくいうその場に居合わせたようなという表現がピッタリだ。

最後に飛び入りで、新作のDAC用電源ケーブルも一緒に聴く機会を得たのは幸運だ。貝崎さんのご子息の浄さんの会心作。ここで

実はストーリーの続きがあった。車だ。「車の芸術性」を高めるべく、貝崎さんは新事業を立ち上げるといふ。益野さんもフェラーリ12気筒の熱烈なオーナー。車好きのふたりは、その点でもウマがあうようだ。